二十四番

二十五番

二十六番

二十四番観音建立者名

工藤きよ　工藤ユミ　工藤なる
工藤さぐ　工藤ちや

二十五番観音建立者名

木村担道妻　今兵四郎妻　斉藤重五郎妻

長

斉藤定五郎妻　斉藤兼次郎妻　中元男治妻
太田定次郎妻　笠井藤之助妻
松川吉弥妻　佐々木恒太郎母
太田善太郎妻　中元三太妻
稲垣＝岩井茶一郎妻
カセ＝神島徳太郎

富

二十六番観音建立者名

平川豊作　平川由次郎　平川由八
平川兵太郎　平川久男

神社）＝十一面観世音菩薩＝五所川原市大字前田野目字野脇

第二十六番　法眼寺＝十一面観世音菩薩＝黒石市山形町宝巌山法眼寺

第二十七番　袋観音堂（白山姫神社）＝聖観世音菩薩＝黒石市大字袋字富岡

第二十八番　広船観音堂＝千手観世音菩薩＝南津軽郡平賀町大字広舟字平沢

第二十九番　沖舘観音堂（神明宮）＝十一面観世音菩薩＝南津軽郡平賀町大字沖舘字宮前

第三十番　大光寺慈照閣（保倉神社）＝千手観世音菩薩＝南津軽郡平賀町大字大光寺内滝本

二十七番

二十八番

二十九番

二十七番観音建立者名

沢田立雄　沢田長四　沢田兼七
沢田吉吉　沢田子之助　沢田松太郎

二十八番観音建立者名

鎌田岩吉　斉藤由八　斉藤直衛
斉藤専太郎　斉藤善太郎
斉藤男治　斉藤専九郎

二十九番観音建立者名

伊藤吉二　伊藤太栄　伊藤大五郎
伊藤チヨ

第三十一番　居土普門堂＝千手観世音菩薩＝南津軽郡大鰐町大字居土

第三十二番　苦木観音長谷堂＝聖観世音菩薩＝南津軽郡大鰐町大字熊野平

第三十三番　普門院＝聖観世音菩薩＝弘前市西茂森町

観音菩薩様は母親のようにやさしい仏で、その観音の功徳は『種々重罪五逆消滅・自他平等即身成仏』『家内安全・諸願成承』とあるところから、観音信仰は一般大衆に受け入れられ、津軽では明治時代の中期に各村々に定着して、観音堂が建立され、観音像を安置して、観音講中によって形ち作られ保持されてきている。

津軽で、古くは津軽三千坊、

三十番

三十一番

三十二番

三十番観音建立者名

白崎口八　内海市口郎　沢田専四郎
花田長口郎　舛甚千口代　鳴海峯四郎
鳴海口郎　木立口口郎　中村口作
木立口口郎　木立間五郎　吉崎弥五郎
黒川長五郎　今弥五郎
鳴海口太郎　舛甚半四郎

三十一番観音建立者名

泉谷嘉吉　木下銀作　内海男治
今寅吉　吉崎金作　今由次郎
蛸島繁太郎　三上万太郎

三十二番観音建立者名

櫛引七郎　蛸島寅次郎　蛸島藤吉郎
蛸島佐之　蛸島辰五郎
蛸島嘉助　蛸島繁吉

昭和八年七月十八日建立

（阿闍羅、十三、梵珠）が史記にとどめられているところをみると、熊野修験行者によって観音信仰が津軽の浦々に広まっていったのだろう。

日本では西国三十三観音札所めぐりの巡礼があまりにも有名であるが、上方参りもでない、津軽三十三観音巡りもできないその日ぐらしの貧乏にあいぐ嘉瀬の農民は、小作人は、何に救いを求めたであろうか。

昭和八年、嘉瀬の人達は、立山に観音様を祭り、その巡路参道に講中連中でもって三十三体の観音石像を配し各自の守り本尊としたのである。

石像にきざまれている寄進者の大方は、観音様の膝（ひざ）にまねかれ亡きも、その名は台座に残る。

三十三番

三十三番観音建立者名

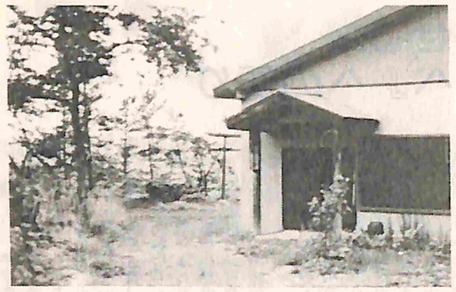
鳴海永八　鳴海善八　花田甚助　内海勘四郎　鳴海専助
鎌田松五郎　津島嘉吉　神島安五郎　蛸島イサ　蛸島サヤ
鎌田善七　吉崎専四郎

七面天女の碑

昭和16年旧6月19日 建立

設立協力者名

松井武任　岡田武夫　小田桐熊四郎
土岐喜久丸　泉寅吉　泉仁太郎
泉勇作　土岐綱吉　上田勝馬
東潤太郎　浜田永作　鎌田君吉
白川松五郎　原田耕造　笠原作太郎
岡田慶一　伊丸岡利八　浜田哲三
今勝太郎　鶴岡忠三　中野勝弘
高橋公　北村子之松　小山内照麿



観音堂

立山通弥観音山。嘉瀬スキー場と言ったら、青森県の西北五地方では芦野公園と並んで名の通ったところと言った方が早い。春はワラビ狩り、秋はキノコ狩りの丘で、嘉瀬に生れた人にとっては憩いの丘。古里帰郷の散策の丘である。

この丘の付け根に一つ森、二つ森の旧蹟地があるところから、嘉瀬古代人の住居跡だろうと『ふるさとを探る会』では想定、実地蹟査を計画している。五月『かたりべ』の編集を終って頭のカタマリ解消に一日立山に歩を運ぶ。松林の日影雑草の中に、二・三輪の一人静草の花の白さが目にしみ入る。（取材企画構成　木下清一）

踏査記録　嘉瀬賽の河原地蔵尊

昭和56年９月19日、嘉瀬ふるさとを探る会定例会で、嘉瀬賽の河原地蔵尊を調査する。この地蔵尊は150年程前、広西坊が来村したとき、小栗崎松川儀兵衛宅（現在の松川新八定附近）の屋敷にあったタモの木で作ったものと伝えられているもので、古考の話によると、一本のタモの木から三体の地蔵尊を刻み、一体は西部千貴に、もう一体は川倉地蔵尊であると言うが、さだかでない。

賽の河原とは、小児（こども）が死後に行き、苦しみを受ける処が三途（さんず）の河原という。小児がここで石を積み塔を造ろうとするが、大鬼が来て、これを潰し、小児をいじめるという。これは母に多大な苦痛を与えて生れたのに、幼い時死んだなら母を恩に報えないことになるから、その罪を責められるのだが、その時地蔵菩薩が来て、小児を救に守るという。

嘉瀬賽の河原地蔵尊は背丈175センチ、胴回り93センチで、頭は剃髪で法衣をまとう、比立（ひく）（法師姿）で、左手に宝珠を、右手に錫杖（しゃくじょう）を持つ立像で、一切衆生の願いを意のままにかなえてやる心を示している。江戸時代、貧困に悩んだ農村では『間引』をした。尊い産児の生命を無惨に圧殺する風習や、生後間もなく死亡した哀れな魂を供養するために地蔵を建てて、地蔵菩薩の慈悲にすがる信仰から、民間に広く崇信されるようになった。

この嘉瀬賽の河原地蔵尊も、昭和57年４月『老人いこいの家』から出火の際類焼、焼身地蔵に変わり果てた。

（取材木村）＝踏査者　木村治利・山中正津・秋元惣之進・山中長三郎・沢田薫

赤鉛筆

編集主幹　木下清一

昭和五十六年六月『かたりべ』第一集を発行してから一年近くになって。芦野公園さくらまつり最終日の五月五日に、桜の散り初めたとき、第二集の編集割付けを終った。あとは編集委員会で決議して、印刷発注するだけだ。

嘉瀬ふるさとを探る会、第三集の企画に向けて、今日から出発点に会員は並んだ。資料蒐集に走れ。俺達の生きている限りは『かたりべ』の灯は消さないと、会員の意気さかん、その熱気にあおられる。これも編集冥利か。

発行日　昭和五十七年六月二十六日
発行所　北津軽郡金木町嘉瀬　嘉瀬ふるさとを探る会
発行者　木村治利
編集人　木下清一
印刷所　㈲八戸プリント（八戸22－6640）　沢田孝

ふるさとの本コに寄せる『かたりべ』への便り

湯本正美

謹啓、盛夏の候、益々ご健勝の段何よりとお慶び申し上げます。過日は、ふるさとのかたりべ第一集をお贈りいただき真に有難うございます。

表紙の人丸神石のカラー写真、嘉瀬館見取図、嘉瀬城見取図、それに加えて、主題論文の『いごぐ穴』と天明の飢饉、中柏木部落成立と氏族構成の研究、嘉瀬今昔、柿本人麻呂と『いろは歌』、嘉瀬八幡宮考察、道上方見物紀行録、むかしがたりっこ等どれも内容の充実したもので、私は興味深く読めました。

特に天明飢饉の地獄図絵にも等しい惨状には目を覆うものがあり、寒冷と豪雪の厳しい自然の要条件の中に生きなければならなかった吾等の祖先の生活が、閉鎖的藩閥政治の幣と相併って、いかに惨酷であったかが偲ばれます。

また『道』の研究も面白く拝見し、古代蝦夷民族と中世の軍事侵略や近世の幕藩政治と『道』が、どんな発達を遂げて来たか、嘉瀬を舞台として解明されたことは非常に大きな収穫だと思います。現在の小学校、中学校、高等学校の児童生徒諸君には、郷土をより深く知る上から貴重な教材になると思います。今後の研究だろうと思いますが、人麻呂と人丸神石とのゆかりの内容を解明されることを期待致します。

もう一つ中柏木部落成立と氏族構成の研究及び嘉瀬今昔の呼び名ッコに関連して、この地方の『家紋』の研究もあってよいではないかと思います。

兎も角、第一集は皆様の真摯な調査と研究によって実に立派に出来上って、心からお喜びお祝い申し上げます。これを機会に、嘉瀬や近隣の町村にも郷土研究の輪が拡がってゆくことと思います。第二集、今から心待ちにしています。

南郡尾上町　白戸金四郎

前略ごめん下さい。貴会発刊の『かたりべ』を新聞で知り金木町教育委員会の方にお願い申し上げた所、心良くお世話下さり、お蔭様で本日入手いたしました。早速拝読させて頂きましたが、実に興味ある研究成果が満載され、一気に読了してしまいました。

また貴会の歩みを見て、その活動に只々驚き入るばかりでした。当町に於ても、聊か文化財の保護活動や郷土の歴史を探り、記録に残すことをやって居りますが、行政べったり形で、折角あった郷土史の会を活動しないまま解散してしまい、担当者として落胆している昨今です。

本日貴読より、自主活動を行っている貴会のあり方を見て、羨しい限りでございます。今後は貴会を見習って、自主活動の出来る組織づくりに意を注ぎたいと強く感じた次第です。

歴史書は巷に氾濫すれど、庶民の側から掘り起した、庶民の歴史書は極く稀れで、日頃不満を託っている一人ですが、その意味からも『かたりべ』は実に貴重な存在で、我が意を得た感が一杯です。

どうか今後引続き購読させて頂きたく、今から申し込んでおきます。

森田村床舞　木村国史郎

未筆ながら貴会の発展と会員皆さんの益々ご活躍あらんことを念願してお礼といたします。

この度、ふるさとの『かたりべ』第一集を読む機会が出来て大変勉強になりました。

特にいごく穴と天明の飢饉、道、上方見物紀行録など興味深かった。管江真澄の床舞紀行など、床舞に生れ育った私ですが、まだこの本は読んでいない。（当時の床舞は床前であったことはたしかだ）

さて何か感想を書いてくれるようとの話でしたが、いごく穴について、（語原不明）とありますが、いごくという方言が何処からきたかということになります。勿論私など大刀打できません。しかし『いごご』『いごく』などという津軽の方言からきていることは確かだと思います。

書類や文書など整理しないで箱につめ込むときとか、衣類など、たたまず無雑作にタンスや入物に放り込む時、或いは、リンゴや外の果物を選別もしないで箱に詰めこむ時など『いごご』に（入れるな）という。このように考えますと、無雑作に整理もしないで、一しょくたに放り込むというふうに解してもいいのではないか。

今でも、かやぶきの古い農家には、籾や袋に詰めないで、板の枠組の中に貯蔵しておく場所があり、このところを『いごく』といいます。このように無雑作に入れるのであるが廃棄物を捨てることとちがった意味があることはいうまでもありません。

以上のことから考えて、飢饉の際、死んだ人たちを葬式も済ませずに穴を掘って捨てたその場所を『いごく穴』といっても不思議でないと思います。語原不明といっても、その位いのことは知っているといわれれば、私の早とちりであって、おわびいたします。第二集が早く出ることを期待いたします。

土岐兼房

昨年七月八日のどを痛みて台湾に転地療養に行ってきました。お蔭様で快方に向い、この頃はすっかり立ち直りました。そのため急に忙しくなり、一日に埼玉の仲間たちから、『励ます会』に招かれたり、教え子たちの短歌の学習に追い廻されたりという毎日で、従弟の保正君と約束した原稿も、そのために遅れました。お許し下さい。

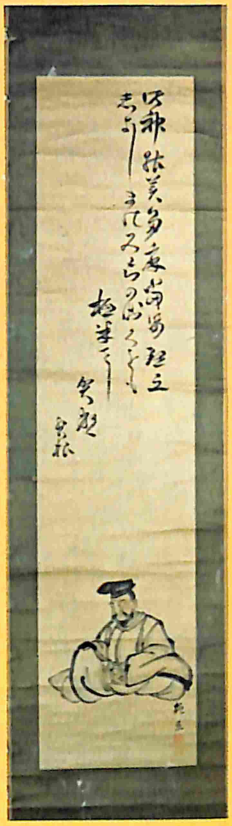
一通り読んで、いろいろ参考になりましたが、圧巻は外崎三千男先生の『人丸について』の研究で、敬服しました。ピアノに生涯をかけて来た先生の論考に驚いています。他の記事の中で、原稿集めの困難を訴えるひとつが、最後まで、私の心にひっかかりました。これは『かたりべ』結成の原点に帰って検討すれば明らかになる事だと思います。

私の知っている嘉瀬の民謡の唄い手は、小山内渺遊、木村治郎、鎌田稲辰、鎌田稲一、山中一雄らで、他は名は知れなくても多くの唄い手がいるだろう。名前の出た中、生存者は得意唄、特徴、功績を挙げ、テープに納めることを忘れてはならない。『かたりべ』に掲載される唄い手は写真も添える。

第二段としては、民謡と踊りについて、歌詞の変遷や流行の波（人気の動き）、どこから移入した歌が、何時頃からか、替え歌を募集する、次に新しい作詞家、作曲家の紹介、歌詞は誌上で唄といっしょの曲はテープに納める。私の知っている作詞家では小山内昭人がある。

嘉瀬のホーハイ節、この歴史的伝統を解明する事は至難の業である。県内、他府県と分けて、上位にあるものは勿論、滅亡しかけている、ささやかな唄も蒐集（発掘者の名も）以上『かたりべ』に期待します。

人丸神石ゆかりの柿本人麻呂尊像



梧丘画

此神の美をたまはりし
敷きしまのみちのおくおも
極めてし
かな
磐根

（北津軽郡板柳町在住　山中喜美雄氏蔵）

嘉瀬ふるさとを探る会

会員名簿

会長　木村　治利　新提町
副会長　原田　万治　中柏木
会員　佐野　洪　下古町
同　外崎三千男　畑町
同　木立民五郎　昭和町
同　土岐　保正　上古町
同　伊藤定四郎　小栗崎
同　秋元幸之進　下古町
同　小山内嘉一郎　下古町
同　沢田　政孝　後町
同　須崎　正敏　畑中
同　木下　俊蔵　下辰立
同　山中
同　山中
同　沢田
同　秋元
同　木下
同　秋元
事務局長　沢田
会計局長　木立
編集局長　木下

伊藤忠吉記念図書館
1090003894